

行動と意味から見た街歩き体験の分析

高浜 康亘¹・福井 恒明²

¹非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail: takahama@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

²正会員 博士(工) 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻
(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail: fukui@csur.t.u-tokyo.ac.jp)

近年、歩行者に焦点を当てたまちづくりが増えるとともに、回遊行動の研究も歩行者の行動特性の把握に関して様々な知見が得られている。本研究では、そのような街歩きの「行動」だけでなくその「意味」も考慮して分析する手法を提示し、街歩きにどのような特徴があるかを明らかにして「街を歩く」とはどのような体験であるかを把握しようとするものである。3都市を対象地、60歳以上の人を被験者とした実験により、街歩きの「行動」の類型は来街経験や街歩きの慣れによってある程度の説明が可能であるが、「意味」の類型は来街経験・街歩きする街・被験者の街歩きの傾向のどれによっても説明できず、その街歩きごとに個別の体験である可能性を明らかにした。

キーワード：街歩き、回遊行動、意味、体験、GPSログデータ、シニア

1. はじめに

(1) 研究の背景と先行研究

近年、「歩いて楽しい街」や「回遊性の向上」など、歩行者に焦点を当てた言葉やまちづくりの施策をよく見かける。またそれだけでなく、いわゆる「散歩本」がメディアで取り上げられたり、テレビではレギュラーの街歩き番組がいくつか組まれているなど、市民の側からも街歩きに注目が集まっていると言えるであろう。

そのような事情を反映してか、2000年頃から「商業地の回遊行動」に関する研究は増えており、その中から回遊行動に関して様々な知見が得られている。例えば、高橋ら¹⁾によると、通りの店舗数密度が高いほど、店舗への立寄り回数が増えることや歩行速度が遅くなること、立寄りが最も多いのは歩行速度が54~60 m/minのときであることが明らかにされている。また、朴ら²⁾によると、歩行者回遊は基本モジュール(回遊単位)の重ね合わせで広がっていくという仮説のもと、浦和・吉祥寺・自由が丘を対象に、街区形態や集客拠点店舗と回遊単位との関係を明らかにしている。

このように回遊行動の研究に関しては、歩行者と店舗ないし街との関わりあいという点において、高い成果を挙げていると言える。しかし、ほとんどの先行研究では、歩行者の詳細な行動特性を量的に記述することに主眼があり、その行動の背後にある意図や、その行動がどういった体験として認知されているかといった質的な部分は

捨象されてきた。「歩いて楽しい街」とか「回遊性の向上」を考える場合、その本質は、街歩きの一連の行動の中でどういったことを考え、なにを感じとるかという内面的なところにあるのではないと思われる。すると、それを体験する個々の人たちが街歩きをどう捉えているかを、把握することが重要であると考えられる。

(2) 研究の目的

そこで本研究は、「街を歩く」ことがどのような体験であるかを把握するために、

- 街歩きを行動だけでなく、その意味も考慮し分析する手法を提示する
- その手法を用いて、街歩きの行動とその意味にどのような特徴があるかを明らかにすることを目的とする。

(3) 用語の定義

本研究では、「街歩き」という言葉を「徒歩による街での活動全般」を指すこととする。すなわち、まちなかでの休憩や入店という行動も「街歩き」に含める。なお、先行研究では同様の意味を「回遊(行動)」と定義して使う例が多いが、これらは「決められたルートに沿って歩く」「(地図で見たときに)ループ状の経路を歩く」という意味を持つ場合があり、混乱を避けるために使わないこととする。

(4) 研究の方法

本研究の目的を達成するには、街歩き中の行動にともなう発生する体験の意味、あるいはその行動を発生させた意図に関するデータを必要とする。これらを得るために、実際の街で被験者に「街歩き」をしてもらい、GPSロガーとICレコーダーを用いてその経路と会話を記録する。さらに、街歩き直後に被験者にインタビューをすることでより詳細かつ具体的な街歩き体験の意味を把握することとする。そうして得たデータを行動・意味の両面から分析し、街歩きにどういった特徴が見られるか、それはどのように体験されるかを考察する。

2. 調査の対象地と対象者

(1) 調査対象地

本研究は街歩きという「体験」に注目している。そのため、対象地は住宅地や公園に比して来街者が多く、興味を引く様々な要素が点在していると予想される「商業地」かつ、「街歩きする街」として認知されている場所とする。また、その地区の特異性をできるだけ排除し、よりクリアに街歩き体験を捉える必要があると考え、複数の地区での比較研究を行う。以上を考慮し、浅草・吉祥寺・銀座の3地区を、調査の対象地とする。

(2) 調査対象者

調査対象者（実験の被験者）は、60歳以上の人とする。これは、対象者が街歩きの中で感じたことや考えたことをもとに街歩き体験を分析する本研究において、街歩きの経験、あるいは人生経験が若者より多く、街を歩くことにより多彩な意味を見いだす可能性が高いと考えたためである。

3. 実験

(1) 実験の目的

来街者の行動と、その街歩き体験がどのように感じられているのかを把握することを目的とする。具体的には、来街者が街歩きの際に注目する要素や、歩行経路とその選択意図、その他街歩き中に考えたことに関するデータの取得を目的とする。

(2) 実験の方法

実際に被験者に対象地を街歩きしてもらい、街歩き中の歩行経路をGPSロガー、会話をICレコーダーを用いて記録する。また、街歩きの印象や上記データの補足は、

街歩き実験直後に行うインタビューにより取得する。

具体的な実験の条件は、以下の通りとする。

a) 対象地

前述の理由から、浅草・吉祥寺・銀座を対象地とするが、その中でとくに決まった範囲は設けない。すなわち、例えば浅草なら、被験者が考える「浅草」の範囲が、そのまま対象範囲となる。

b) 被験者

60歳以上の人を2人1組として5組（Group A～E）のペアを作る。3つの対象地について、同じペア¹¹で街歩きをしてもらう。ただし、街歩き中に自然に会話が発生するよう、ペアはももとの知り合い（例：夫婦、シニアサークルの友達）とする。

c) 制限時間

できるだけ日常の来街に近いデータを得るため、街歩き実験の制限時間は設けない。被験者が街歩きに満足し、もう十分だと感じた時点で街歩き実験を終了とする。

(3) 実験の結果

5組3都市、計15回の実験の結果を図-1に示す。図中の吹き出しで表されている部分は、街歩き中の会話から判断される行動や意思、感じたことなどをその会話が起った場所と対応させたものであり、その話題を要約して記述した。これらは街歩き体験全体の中で、ある程度のまとまりを持った体験の要素の最小単位であると考えられるため、この吹き出しに対応する体験を「単位体験」と呼び、これから街歩きの「行動」と「意味」を抽出していく。その方法に関しては4章で詳述する。

また、表-1～4に、被験者データ・ペアの関係・来街経験・実験時データを載せた。

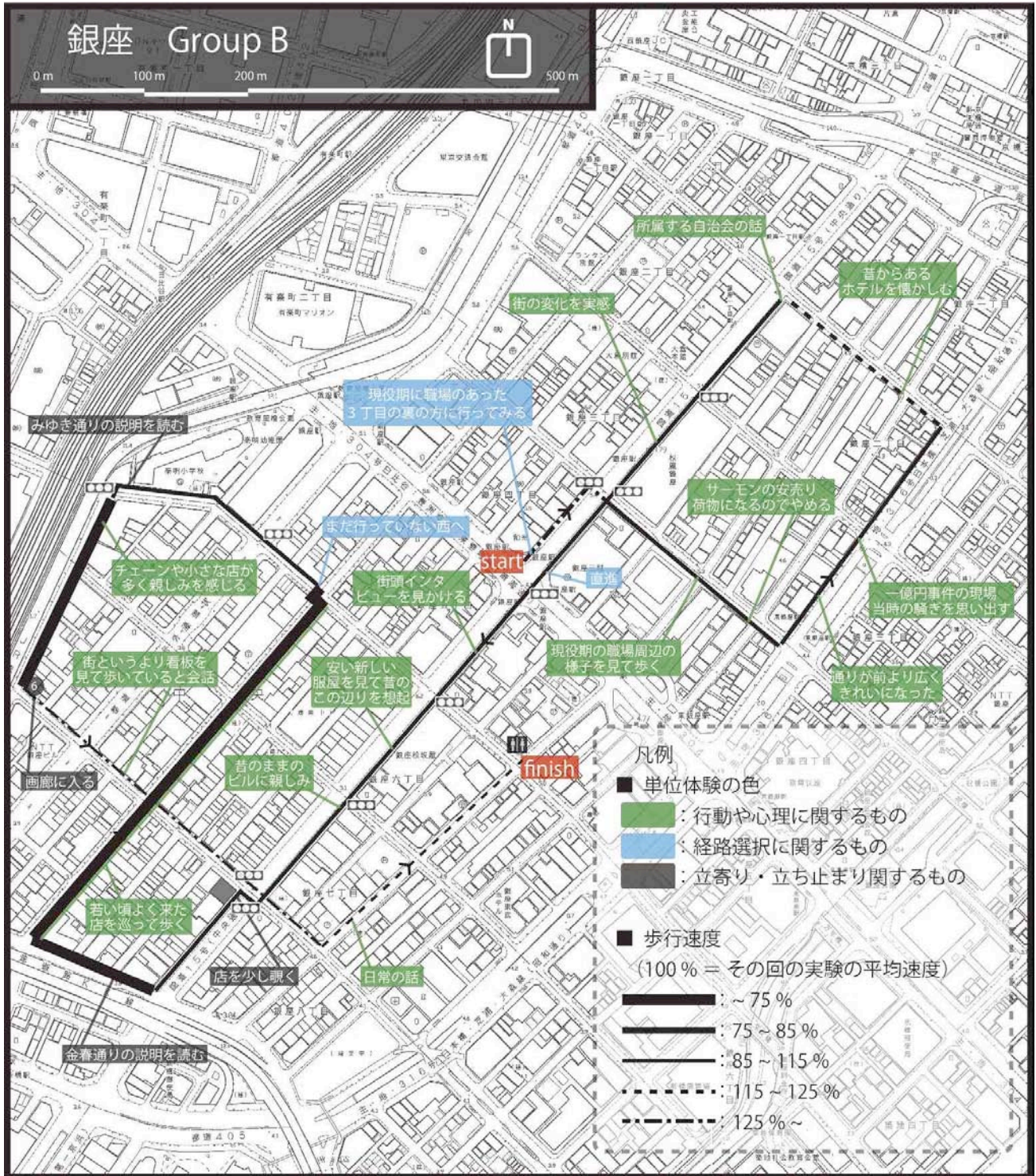


図 - 1 実験結果 (Group B, 銀座)

表 - 1 被験者データ

Group	被験者	年齢	性別	住まい	最寄駅	よく行く街	備考
A	A1	79	男	文京区	春日	池袋・上野広小路	
	A2	78	男	文京区	根津	根津	浅草のみ参加
	A3	71	男	文京区	飯田橋	上野・新宿・池袋	吉祥寺・銀座のみ参加
B	B1	70	男	板橋区	ときわ台	池袋	
	B2	62	男	板橋区	ときわ台	池袋・新宿	
C	C1	72	男	三鷹市	三鷹台	吉祥寺	
	C2	67	女	三鷹市	三鷹台	新宿	
D	D1	66	男	三鷹市	三鷹	三鷹・吉祥寺・神田	
	D2	64	女	三鷹市	三鷹	三鷹・吉祥寺	
E	E1	75	女	江戸川区	西葛西	飯田橋・日本橋	
	E2	72	男	豊島区	巣鴨	銀座・上野	浅草・吉祥寺のみ参加
	E3	61	女	文京区	江戸川橋	銀座・飯田橋・大手町・丸の内	銀座のみ参加

表 - 2 被験者ペアの関係

A	自治会の友人
B	地元の絵画クラブの友人
C	夫婦
D	夫婦
E	歴史案内ボランティアの友人

表 - 3 実験対象地区への来街経験

被験者	浅草		吉祥寺		銀座	
	昔	現在	昔	現在	昔	現在
A1	◎	○	△	△	△	△
A2	◎	△				
A3			◎	△	○	△
B1	○	○	◎	△	◎	○
B2	◎	◎	△	△	△	△
C1	△	△	◎	◎	△	△
C2	△	△	◎	◎	△	△
D1	○	△	◎	◎	◎	△
D2	△	△	◎	◎	△	△
E1	○	△	○	△	◎	○
E2	◎	◎	△	○		
E3					◎	○

凡例 ◎よく来る ○たまに来る △ほぼ来ない

表 - 4 実験日時・歩行距離・平均歩行速度

Group	都市	実験日 (2010年12月)	時間	歩行距離 (km)	平均歩行速度 (m/min)
A	浅草	12日 木曜日	13:00 - 14:11	2.5	39
	吉祥寺	21日 火曜日	13:53 - 14:51	3.2	62
	銀座	14日 火曜日	13:27 - 14:26	1.5	60
B	浅草	12日 木曜日	09:58 - 11:25	2.1	37
	吉祥寺	13日 月曜日	10:18 - 11:56	2.6	38
	銀座	17日 金曜日	13:56 - 15:31	3.3	42
C	浅草	21日 火曜日	09:52 - 11:00	1.1	25
	吉祥寺	16日 木曜日	13:03 - 14:15	1.1	61
	銀座	10日 金曜日	09:45 - 10:51	2.7	66
D	浅草	24日 金曜日	13:56 - 15:57	2.5	33
	吉祥寺	10日 金曜日	09:55 - 11:01	3.1	52
	銀座	17日 金曜日	09:54 - 11:46	2.0	42
E	浅草	24日 金曜日	10:00 - 11:12	2.9	50
	吉祥寺	27日 月曜日	13:01 - 14:23	2.9	54
	銀座	22日 水曜日	10:07 - 11:06	1.5	51

4. 分析と考察

以下の分析では、「3 (3) 実験の結果」で述べた「単位体験」を分析の対象とする。なお、分析対象となる単位体験はのべ 15 回の実験結果から、344 件抽出できた。

(1) 行動属性と意味属性

例えば、図 - 1 中の「サーモンの安売り 荷物になるのでやめる」という単位体験は、「店を見る」ことで、サーモンの安売りをしている量が大きく荷物になりそうだという「情報を得」ており、「一億円事件の現場 当時の騒ぎを思い出す」という単位体験は、昔一億円の入った鞆が隠されていた「植え込みを見」て、そのときに野次馬をしたという「思い出を振り返」っている。このように、本分析では単位体験を「店を見る」「植え込みを見る」のような「行動」と、「情報を得る」「思い出を振り返」のような行動の背後にある、または行動にともなって生じる「意味」に分けて理解する。

なお、例えば「交番が昔から変わらずあることに感心する (Group A, 浅草)」という単位体験は、「交番を見る」という行動に対して、「自分の知っている昔と変わらず」に交番が残っているという「発見」をしており、その単位体験の主要な意味が複合的であると言える。この場合、1つの単位体験が2つの意味を持つと解釈することとする。

a) 行動属性

単位体験の「行動」を、その内容から以下の7つに分類した。

購買：商品を買う、または対価と引き換えにサービスを受ける場合。

点景：個々の店舗、商品、看板など、街の中にある比較的小さなスケールのものを見る場合。

景色：街並、建物群、袖看板の連なりなど、街の中にある比較的大きなものや「点景」の集合を見る場合。「大勢の人を見る」も含める。

人：大道芸人、観光客、店員など、街にいる特定の人物に注目する場合。

会話：ペアを除く、街の人と会話する場合。

休息：休むためにカフェに入ったり、特別な目的無く同じ場所に留まっている場合。

移動：単位体験が街の要素と関係なく、ただ単純に移動している、または静止していても行き先の会話など移動の意思が含まれる場合。

これらを「行動属性」と呼ぶ。それぞれの行動属性の出現回数は、表 - 5 の通りである。

表 - 5 各行動属性の出現回数

購買	点景	景色	人	会話	休息	移動
21	107	120	12	11	15	73

なお、表 - 5 の合計が 359 となり単位体験の総数 344 より多いのは、4(1)で述べたように1つの単位体験が複数の行動属性を持つ場合があるためである。その組み合わせについて表 - 6 に示す。

表 - 6 組合わさった行動属性

点景と会話	4回	点景と景色	1回
購買と会話	2回	点景と人	1回
点景と休息	2回	点景と景色と休憩	1回
景色と休息	2回	景色と人	1回

b) 意味属性

単位体験の「意味」を、その内容から以下の8つに分類した。

発見：新しいことを知ったり、知っていたことでも改めて体得した場合で驚きや感動が認められる場合。

情報取得：事前に知っていたかどうかに関わらず情報を得て、「発見」ほど驚きや感動がない場合。

既知情報：持っている情報ないしイメージに従って行動する場合。

歴史：歴史など直接体験していない過去を想起する場合。

未来：街の将来を考える、渡す相手を考えて土産物を購入するなど、その街歩きよりも未来のことを想像する場合。

比較：他の場所を連想したり、比較したりする場合。

飽きる：その場所に対して特別意味を感じていない、その場所と関係が無い、消去法で選択をした場合。

これらを「意味属性」と呼ぶ。それぞれの意味属性の出現回数は、以下の通り。

表 - 7 各意味属性の出現回数

発見	情報取得	既知情報	歴史	思い出	未来	比較	飽きる
86	97	60	17	40	12	10	35

合計が 357 となり単位体験の総数 344 より多いのは、4(1)で述べたように1つの単位体験が複数の意味属性を持つ場合があるためである。その組み合わせについて表 - 8 に示す。

表 - 8 組合わさった意味属性

発見と思い出	7回	発見と歴史	1回
発見と比較	2回	発見と未来	1回
情報取得と歴史	1回	情報取得と未来	1回

c) 行動属性と意味属性の関連

行動属性と意味属性の対応を調べ、表 - 9 にまとめた。なお、例えば「交番が昔からあることに感心する」は

「景色」の行動属性に対し「発見」「思い出」という2つの意味属性を持つが、これは「景色 - 発見」と「景色 - 思い出」それぞれ1カウントずつとした。

表 - 9を見ると、「点景 - 情報取得」や「景色 - 発見」のように強い関連のある行動属性と意味属性があるが、少数ながら多様な対応もまた見られる。そのため、単位体験の分析については、行動と意味の両面から考察することが有効であると考えられる。

表 - 9 行動属性と意味属性の対応
意味属性

行動属性	意味属性								計
	発見	情報取得	既知情報	歴史	思い出	未来	比較	飽きる	
購買	2	5	5	0	1	10	0	0	23
点景	18	64	6	4	13	1	1	1	108
景色	57	19	5	12	18	1	7	3	121
人	10	2	0	0	0	0	0	0	12
会話	1	10	0	0	0	1	0	0	12
休息	1	7	1	2	0	0	0	5	16
移動	1	1	43	1	2	0	0	26	74
計	90	108	60	19	34	13	8	35	367

(2) 行動の分析

a) 行動パターン

全 15 回の、各回の街歩きについて単位体験を行動属性で分類した。その件数の割合を図 - 2 のように整理した。そしてこの行動属性の構成割合について、クラスター分析を用いて分類する。分析結果のデンドログラムは、図 - 3 に示す。

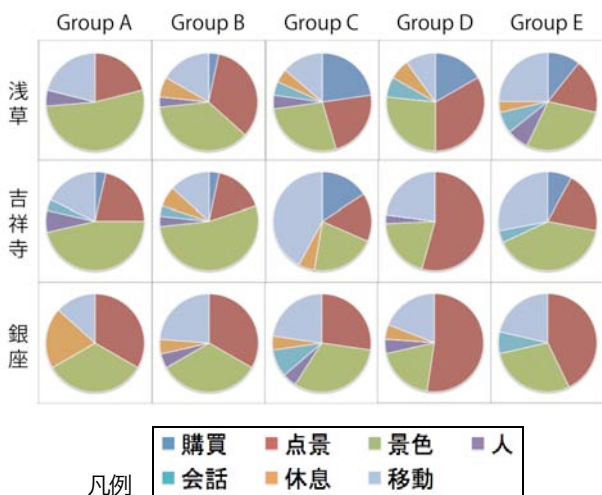


図 - 2 行動属性の構成割合

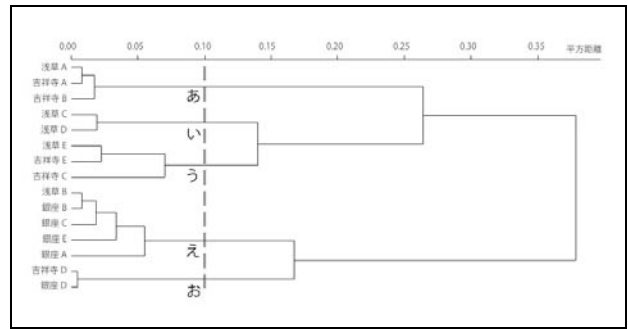


図 - 3 行動属性の構成割合分析 デンドログラム

破線の位置でデンドログラムを切断し、それぞれの行動属性の構成割合を5つの「行動パターン」に分類した。それぞれの特徴は以下の通りである。

- あ. 景色型 (浅草A 吉祥寺A 吉祥寺B)
「景色」がおおよそ 50% を占める。
- い. 購買・点景・景色型 (浅草C 浅草D)
「購買」「点景」「景色」が比較的均等である。
- う. 平均型 (吉祥寺C 浅草E 吉祥寺E)
「景色」「移動」が大きく、「点景」がそれに次いで大きい。全 15 個の平均に近い構成割合を示しているため、便宜的にこの名前とする。
- え. 点景・景色型 (銀座A 浅草B 銀座B 銀座C 銀座E)
「購買」が小さく、「点景」「景色」が均等である。
- お. 点景型 (吉祥寺D 銀座D)
「購買」が無く、「点景」がおおよそ 50% を占める。

b) 行動パターンと来街経験

図 - 2 と表 - 3 のデータから、行動パターンと、被験者のその街への来街経験との関係を考察する。

- あ. 景色型 (浅草A 吉祥寺A 吉祥寺B)
「昔よく来街したが最近はやって来ない」という共通点が見られた。昔よく来た頃と現在とでの街の変化を感じながら街歩きしていると考えられる。
- い. 購買・点景・景色型 (浅草C 浅草D)
「あまり来街したことがない」という共通点が見られた。偏りない街歩き行動で、街を感じられる要素を探して歩いていると考えられる。
- う. 平均型 (吉祥寺C 浅草E 吉祥寺E)
「昔から同じくらいの頻度で来街している」という共通点が見られた。街の情報が同じペースで更新されており、平均的な街歩き行動になると考えられる。
- え. 点景・景色型 (銀座A 浅草B 銀座B 銀座C 銀座E)
「昔からよく来街する」ペア (浅草B 銀座B 銀座E) と「あまり来街したことがない」ペア (銀座A 銀座C) が属した。前者は購買をしなくても店や街並を見てその街を感じる方法を知っていて、後者は「購買・

点景・景色型」と同様、街を感じられる要素を探して歩いていると考えられるが、購買がないのは銀座という街の特徴が影響するためだと考えられる（次項にて詳述する）。

お. 点景型（吉祥寺D 銀座D）

「昔よく来街した」という共通点が見られた。街について知っていることが多く、細かい点に注目して街歩きしていると考えられる。

以上のように、同じ行動パターンをとる被験者Groupは、その来街経験が共通する傾向が見られた。これより、その街への来街経験は来街者の経験値として蓄積され、街歩きのアクティビティや街を見るポイントに対してあるパターンを形成させている可能性が考えられる。

c) 行動パターンと実験対象地区

得られた行動パターンを、実験対象地区に注目して分析する（表-10）。

銀座では、4組が「点景・景色型」、もう1組が「点景型」となった。すなわち、銀座の街歩きでは「点景や景色など街の要素を見る行動が中心」であり、「購買行動が生じなかった」と言うことができる。特に、どの組も購買をしなかったのは銀座だけであり、これは「店が構えずぎでいて入りづらい（Group A）」「外資や老舗が多くて一見さんお断りのように感じる（Group B）」「一流ブランドショップばかりで自分たちには縁が無い（Group C）」という実験内での発言から、高級感や歴史のある店や、それらが並ぶ街の景色が被験者を店に入りづらくさせ、偶発的な購買行動が起こりづらいという可能性が指摘できる。このように銀座という街の特徴は、点景・景色に注目し、購買行動を抑制しやすいというよ

表-10 実験対象地区別行動パターン

行動パターン分類	浅草	吉祥寺	銀座
あ. 景色型	A	AB	
い. 購買・点景・景色型	CD		
う. 平均型	E	CE	
え. 点景・景色型	B		ABCE
お. 点景型		D	D

表-11 被験者別行動パターン(浅=浅草,吉=吉祥寺,銀=銀座)

行動パターン分類	被験者 Group				
	A	B	C	D	E
あ. 景色型	浅 吉	吉			
い. 購買・点景・景色型			浅	浅	
う. 平均型			吉		浅 吉
え. 点景・景色型	銀	浅 銀	銀		銀
お. 点景型				吉 銀	

うに、行動パターンに影響を与えようとする。

d) 行動パターンと被験者

得られた分類を、被験者 Group に注目して分析する（表-11）。

Group A は、浅草と吉祥寺で「景色型」をとり、銀座で「点景・景色型」をとった。ここでは、「昔はこの裏は全部池だった（浅草）」「（井の頭公園で）昔より木が生い茂っている（吉祥寺）」「定食屋を見て昔の銀座を懐かしむ（銀座）」のように、回想にあたって店や景色を見る傾向が見られる。

Group B は、吉祥寺で「景色型」、浅草と銀座で「点景・景色型」をとった。Group B は3都市ともに来街経験が豊富であり、「前に比べればずいぶんきれいになった（浅草）」「昔はこの辺りが駅だった（吉祥寺）」「ここが一億円事件の現場（銀座）」など、過去の体験を回想・確認することが多く、そのときに点景や景色を多く見ており、これがGroup B の街歩きの傾向と言える。

Group C は、3都市すべてで違う行動パターンをとった。浅草と銀座は、前項で述べた銀座で購買が起こりづらいという性質を考えると共通性があるとも言えるが、吉祥寺は被験者の生活圏であることもあり、「移動」が42%を占めている。また、72分の街歩きのうち59分を「ラーメンを食べる」「ヨドバシカメラで孫のプレゼントを受け取る」「セーターを買う」という目的性の高い行動に費やしている。よって、浅草・銀座とは行動パターンに一貫性は認められず、Group C は他の Group のように、街歩き行動に明快な傾向は読み取れない。

Group D は、浅草で「購買・点景・景色型」、吉祥寺と銀座で「点景型」をとった。これは、「購買」も店を見るという点において「点景」の一部だと考えその両者を足すと（図-4参照）、3都市とも行動属性の構成割合が極めて類似する。よってこれが Group D の街歩き行動の傾向だと言える。

Group E は浅草と吉祥寺で「平均型」、銀座で「点景・景色型」となった。Group E は浅草・吉祥寺と銀座とでペアが異なっており（補注[1]参照）、それにより行動パターンが異なった可能性が指摘できる。同一ペアで実験を行った浅草・吉祥寺はともに「平均型」であり、被験者の街歩きの傾向であると考えられる。一方、銀座では比較対象が無いため断言はできないが、普段史跡街歩き団体のリーダーをしている被験者（E1）の主導による街歩きだったことを考えると、点景や景色に注目していることは被験者の街歩きの傾向と言える可能性が高いと考えられる。

以上より、Group C 以外にはその被験者ペア特有の街歩きの傾向が存在すると言える。これは、Group C 以外は普段から街歩きをする機会が多いのに対し、Group C は「普段街をブラブラすることはあまりな

い」とインタビュー中に述べており、街歩きに慣れている被験者は街歩きする街が変わってもある程度自分の行動パターンが固まっていて、街歩きに不慣れな被験者は街歩きごとに違った行動パターンを示しやすいと言える。

e) 行動の分析のまとめ

街歩き行動について、以下の考察を行った。

- 行動パターンを5種類に分類した。
- 行動パターンは来街経験に強い影響を受ける。
- 街の特徴が行動パターンに影響する場合がある。今回の対象地では、銀座では購買行動が起こりづらいということが分かった。
- 今回の実験の被験者では、街歩きに慣れているGroupほど、街歩きする街が変わっても行動パターンがあまり変化しない傾向が見られた。

(3) 意味の分析

a) 意味パターン

行動の分析と同様に、それぞれの街歩きにおける単位体験を意味属性で分類し、その件数の割合を図-4に示した。そしてこれをクラスター分析により分類する。

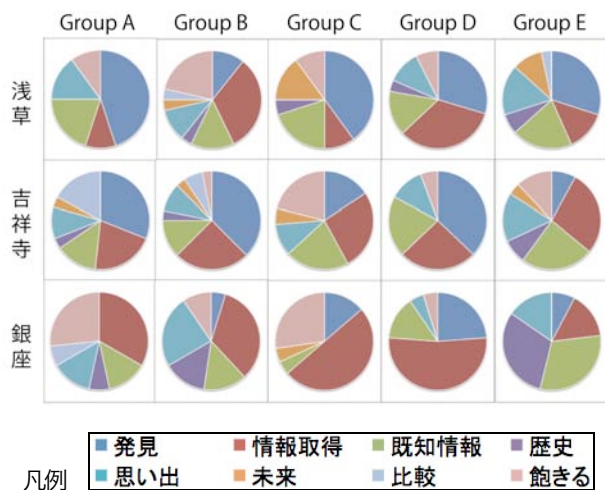


図-4 各実験の意味属性の構成割合

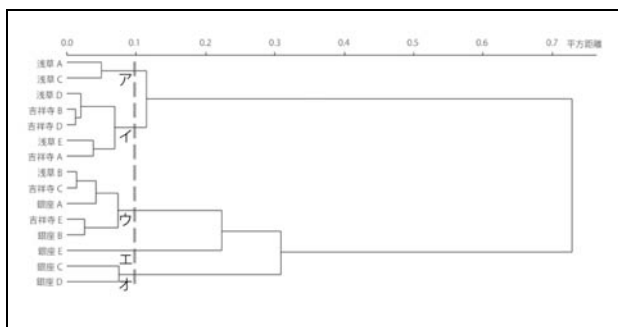


図-5 意味属性の構成割合分析 デンドログラム

図-5の破線の位置でデンドログラムを切断し、それぞれの意味属性の構成割合を以下の5つの「意味パター

ン」に分類する。

ア. 発見型 (浅草A 浅草C)

「発見」が非常に多く、「情報取得」が少ない。

イ. 平均型 (吉祥寺A 吉祥寺B 浅草D 吉祥寺D 浅草E)

「発見」「情報取得」「既知情報」が他の意味パターンに比して均等である。全15個の平均に近い構成割合を示しているため、便宜的にこの名前とする。

ウ. 発見少型 (銀座A 浅草B 銀座B 吉祥寺C 吉祥寺E)

「発見」が少なく「情報取得」が多い。「情報取得」も以下の「情報取得型」よりは少なく、その他では際立った共通の特徴がない。「平均型」よりも「発見」少ないことからこの名前とする。

エ. 知識型 (銀座E)

「既知情報」「歴史」が多く、持っている知識をもとに街歩きしていると言えるためこの名前とする。

オ. 情報取得型 (銀座C 銀座D)

「情報取得」がおおよそ50%を占める。

b) 意味パターンと来街経験

意味パターンと、被験者のその街への来街経験との関係を考察する。

ア. 発見型 (浅草A 浅草C)

「最近の来街があまりない」という点が共通した。

イ. 平均型 (吉祥寺A 吉祥寺B 浅草D 吉祥寺D 浅草E)

「昔よく来たが最近では来ていない」(吉祥寺A 吉祥寺B)という組と「昔から同じくらいの頻度で来街している」(浅草D 吉祥寺D 浅草E)という組が属した。

ウ. 発見少型 (銀座A 浅草B 銀座B 吉祥寺C 吉祥寺E)

「昔から同じくらいの頻度で来街している」という共通点が見られた。

エ. 知識型 (銀座E)

このパターンはGroup Eの銀座だけが属し、その来街経験は「昔よく来街し現在もたまたま来街する」である。

オ. 情報取得型 (銀座C 銀座D)

「最近の来街があまりない」という点が共通した。

意味パターンと来街経験は以上のように整理できるが、例えば「最近の来街があまりない」という観点から見ると、「発見型」「平均型の吉祥寺A, 吉祥寺B」「情報取得型」が当てはまり、「昔から同じくらいの頻度で来街している」という来街経験では「平均型の浅草D, 吉祥寺D, 浅草E」「発見少型」が当てはまっている。このように、同じような来街経験を持っていても違う意味パターンに分類されている例が多く、意味パターンと来街経験の関係は薄いと言える。

c) 意味パターンと実験対象地区

得られた分類を、実験対象地区に注目して分析する(表-12)。

表-12 実験対象地区別意味パターン

意味パターン分類	浅草	吉祥寺	銀座
ア. 発見型	AC		
イ. 平均型	DE	ABD	
ウ. 発見少型	B	CE	AB
エ. 知識型			E
オ. 情報取得型			CD

浅草の「発見型」と銀座の「情報取得型」は、3つの実験対象地区のうち、その地区にしか見られない意味パターンで、かつ複数の組が属していることから、その地区の特徴が意味パターンに影響している可能性があると考えられる。これを詳しく見ていく。

まず浅草の「発見型」に属したGroup A と C の「発見」の内訳を見てみると、A は8回ある「発見」のうち5回が「通りの雰囲気や昔と変わった」などの通りの雰囲気に関するものであり、過去によく来街していた頃の雰囲気と比べながら街歩きしていると考えられる。一方、C の「発見」は8回のうち7回が「鳩」「屋根瓦」「外国人」などのかなり局所的な街の要素に関するもので、これはあまり浅草に来街したことがなく、浅草の場所性とはあまり関係なく興味をひいたものに対し反応しているためだと考えられる。つまり、A と C の「発見」は共通した浅草の特徴に起因するものではないと言えるため、浅草の特徴が意味パターンに影響したとは言えない。

銀座の「情報取得型」に属するGroup C と D は、「松屋の外観が良くない」「ビルや袖看板を見て歩く」(Group C) や、「資生堂パーラーが開店時間前なのであきらめる」「更地の歌舞伎座を見る」(Group D) のように、銀座に特有の店舗・街並に対して情報取得が行われているため、C・Dとも銀座の特徴が影響して意味パターンが決まっているように思える。ところが、Dが銀座5～8丁目を歩いたのに対し、Cは銀座1丁目を大きく越えて北は八重洲通り、東は昭和通りまで歩いて、街歩きした範囲が大きく異なる。また、街歩き全体の印象に関して、Cが「銀座には何もない」「カフェで休むにもどこも高いから結局マクドナルドに入った」と消極的な感想だったのに対して、Dは「(GPSログデータに対し)楽しくてこんなに歩いたと思わなかった」「銀座のオシャレな雰囲気にウキウキした」とかなり肯定的な感想であり、トータルで街歩き体験の印象は大きく異なっていた。よってこの2つが、同じ機構で同じ意味パターンになったと考えることは妥当でない。

以上から、今回の実験において地区の特徴が意味パターンに大きな影響を与えたとは言えない。

d) 意味パターンと被験者

得られた意味パターン分類を、被験者 Group に注目して分析する(表-13)。

表-13 被験者別意味パターン

意味パターン分類	被験者 Group				
	A	B	C	D	E
ア. 発見型	浅		浅		
イ. 平均型	吉	吉		浅吉	浅
ウ. 発見少型	銀	浅銀	吉		吉
エ. 知識型					銀
オ. 情報取得型			銀	銀	

(浅=浅草, 吉=吉祥寺, 銀=銀座)

Group B と Group D で部分的に街が変わっても同じ意味パターンに属した以外は、被験者 Group ごとに見ると街ごとに別の意味パターンをとった。

「発見少型」となった Group B の浅草・銀座に関して、被験者はどちらへの来街経験も多い。しかし、浅草では「演芸ホールの看板をじっくり見る」「浅草寺と景観論争のあった建設中の高層ビルを見る」など、「発見」までの驚きはない情報取得が多く、結果として「発見」が少ないと考えられる。一方、銀座では「1億円事件の現場で当時の騒ぎを思い出す」「若い頃よく来た飲み屋を巡って歩く」といった具合に、具体的な思い出の回想をメインに街歩きしていて、そのため「発見」が少ないと解釈できる。すなわち、質の異なる意味体験が結果として同じ意味パターンにつながっているため、これはGroup B に見られやすい意味パターンだと言うことはできない。

「平均型」となった Group D の浅草・吉祥寺に関して、吉祥寺は普段から来街しており、井の頭公園やハーモニカ横丁など日頃よく行く場所を街歩きしているのに対し、浅草は来街経験が多くなく、仲見世や浅草寺など有名な場所を中心に、おもしろそうな場所を探して歩いている。すなわち、ある程度状況を予測しながらの街歩きである吉祥寺と、手探りでおもしろそうなものを探しながら街歩きした浅草では、どちらも「平均型」となったのは偶然だと考えられ、これが Group D に見られやすい意味パターンだとは言えない。

以上から、意味パターンは被験者ごとに一定の傾向を示すとは言えず、街歩きする街ごとに個別に決まる可能性が高い。

e) 意味の分析のまとめ

街歩き体験の意味について、以下の考察を行った。

- 意味パターンを5種類に分類した。
- 意味パターンと来街経験の間に、明らかな関係性は見出せない。
- 街歩きする街の特徴が意味パターンに影響を与えらるとは言えない。

- 同じ来街者でも、街歩きする街にかかわらず一定の意味パターンをとるとは言えない。
すなわち、これらから、
- 街歩きの意味体験は、来街経験・街歩きする街・被験者の街歩きの傾向のどれによっても類型化できず、その街歩きごとに個別の体験であるという可能性が指摘できる。

(4) 街歩きという体験

本研究では街歩き体験を「行動」と「意味」に分けてとらえ、分析を進めた。ここでは、その「行動」と「意味」を再びかけ合わせて理解し、街歩き体験がどのようなものかを考察する。

実験を実施した15回の街歩きを、行動パターンと意味パターンによって分類した(表-14)。街歩き体験を行動パターンと意味パターンのかけ合わせとして捉えると、それぞれ5種類の行動パターンと意味パターンから、25種類の街歩き体験が得られる可能性がある。本研究の全15回の街歩き実験は、このうちの11種類が該当した。

4(2)および(3)で見た通り、行動パターンは来街経験に影響を受ける傾向が見られた。一方、意味パターンはその街歩きごとに個別的であり、そのパターンの決まり方について、来街経験や地区の特徴では説明できなかった。つまり、街歩きの「行動」は来街者の来街経験や街歩き経験によって一定のパターンが形成されるのに対し、街歩き体験の「意味」は来街経験が増えたり、多くの街を街歩きして街歩きに慣れてもその都度違うため、来街ごとに違った意味体験ができると解釈できる。

5. まとめ

(1) 成果

本研究の成果を以下に示す。

- 街歩きの「体験」に対し、「行動」の評価だけでなく、「意味」を評価する新たな分析手法を提示した。

- 街歩きの「行動」を7種類に分類し、それを用いてそれぞれの街歩きに対して5つの行動パターンに分類した。行動パターンは来街経験と関係が強いが、街歩きする街によって、あるいは来街者が街歩きに慣れている場合はその関係に変化を与え得ることが分かった。
- 街歩き体験の「意味」を8種類に分類し、それを用いてそれぞれの街歩きに対して5つの意味パターンに分類した。意味パターンは来街経験、街歩きする街、被験者の街歩きの傾向のどれによっても説明できず、その街歩きごとに個別的である可能性を明らかにした。
- 街歩き体験を上記の行動パターンと意味パターンのかけ合わせとして考えると、街歩きの「行動」は来街者の来街経験や街歩き経験によって一定のパターンが形成されるのに対し、街歩き体験の「意味」は来街経験が増えたり、多くの街を街歩きして街歩きに慣れてもその都度違うため、来街ごとに違った意味体験ができると解釈できる。

(2) 今後の課題

a) 街歩きの「流れ」

本研究では、独自に定義した「単位体験」を分析対象としたが、その単位体験どうしの関連は捨象して分析した。すなわち、街歩きの文脈というべき、出来事の前後関係は本研究結果に反映されていない。しかし実際には、今回の実験の中で見られた例を挙げると、吉祥寺の七井橋通り(吉祥寺駅と井の頭公園を結ぶ道で、老舗の焼き鳥屋があったり、アジアンテイストの店が軒を連ねている)へのアプローチについて、吉祥寺駅から七井橋通りへと入っていった場合は雰囲気の変化が少ないためか、通りに対して驚きを感じる体験はしていない(Group D・E)。一方、井の頭公園側からアプローチした場合は、七井橋通りの特に活気に対して驚きを感じており(Group A・B)、ここには井の頭公園の静けさとの対比があると考えられる。つまり、同じ七井橋通りを通る場合でも、その前に駅前を経由したか井の頭公園を経由したかで明らかな差異が認められるように、街歩きには

表-14 行動パターンと意味パターンの対応

		行動パターン				
		景色型	購買・点景・景色型	平均型	点景・景色型	点景型
意味 パ タ ー ン	発見型	浅草 A	浅草 C			
	平均型	吉祥寺 A 吉祥寺 B	浅草 D	浅草 E		吉祥寺 D
	発見少型			吉祥寺 C 吉祥寺 E	浅草 B 銀座 A 銀座 B	
	知識型				銀座 E	
	情報取得型				銀座 C	銀座 D

行動・意味ともに前後関係があると考えの方が妥当であり、その影響を反映させた分析手法が今後の課題となるだろう。

b) 被験者属性の多様化

本研究では、2(2)で述べたように、街歩きの経験あるいは人生経験が若者より多く、街を歩くことにより多彩な意味を見いだす可能性が高いと考えられる60歳以上の人を実験の対象者とし、様々な街歩き行動・意味を抽出することができた。そのため今後は、若者や中年層など実験対象者の年齢を広げることや、ペアのあり方を変化させることで、より多角的に街歩き体験の分析ができると考えられる。

謝辞：師走のご多忙な時期に、快く本研究の調査実験を引き受けてくださった12名の被験者の方々の協力なくしてこの研究は成り立ちませんでした。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本研究は東京大学グローバルCOEプログラム「都市空間の持続再生学の展開」の一環として行ったものである。

補注

[1] 体調の問題など、やむを得ない事情でペアの片方が同一でない回のある組が2組（Group A 浅草・Group E 銀座）あった。なお、どのペアも被験者の少なくとも片方は毎回同一である。

参考文献

- 1) 高橋弘明, 後藤春彦, 佐久間康富, 石井雄晋, 齋藤亮, 畑玲子: 商業集積地における来訪者の回遊行動と店舗のひしめき合いとの関係についての研究: 下北沢駅周辺地域を事例として, 学術講演梗概集.F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 2005, p. 1281 - 1282, 2005
- 2) 朴喜潤, 佐藤滋: 中心市街地における都市空間構成と歩行者回遊行動に関する研究: 歩行者追跡調査結果と回遊単位概念を用いて, 日本建築学会計画系論文集第605号, p. 143 - 150, 2006